

第8回

二分・二極化した学級に 手厚い教師サポートでかかわって



広島大学大学院教授
栗原 慎二

埼玉県立高校教諭を18年務めたあと広島大学へ。教師生活の始まりとともに学校教育相談にかかわる。「普通の学校での、普通の教師による、普通の実践」にこだわり続ける。

今月は、攻撃性の高い児童や不登校傾向の児童のいる「二分・二極化した学級」に、ピア・サポートの取り組みをはじめ、手厚い教師サポートでかかわっている事例です。

事例の概要

●学級の様子

勤務校は市内田園地に立地する全校二六〇人の小学校で、「気持ちのよい挨拶とふわふわ言葉、明るい笑顔のあふれる学校」を目指し、ピア・サポートに取り組んでいる学校です。

対象の五年生は、一、二年時には二年級でしたが、三年年から四〇人の単学級となりました。「元気がよい」と表現され続けたこの学級では、A男（No31）を中心に男子のケンカや取っ組み合いが絶えず、落ち着きがなく、衝動的な面が目立ちました。三、四年生のときに、厳しくルールを重視する男性教諭が担任となり、根気強く指導し続けた結果、少しずつ問題行動は減少してきていました。また、女子はリーダー的な女子のグループと、おとなしい女子のグループに分かれていて、前者のグループには男子を大きな声で注意するような児童もいます。後者のグループには友達関係を理由とする不登校傾向の女子児童もいます。学力は平均的ですが二極化しています。

五年生になり、男子児童B男（No37）が両親の離婚に伴い転入してきました。B男は攻撃性が高く、暴力的な行為や「死ね」「殺すぞ」等の暴言があります。そうしたB男に対し、男子の多くは否定的な感情を持つようになりました。特にA男は、毎

日のようにB男ともめ、周囲の男子はその様子をはやし立てたりするようになりました。リーダー的な女子は、それらを解決しようと大きな声で注意をすることもありましたが、止めることができず悔しい思いをしていました。保護者からは、「B男への適切な指導」を望む声があがってきました。

また、六月には転入児童C子（No41）を迎えました。アスベルガー症候群があり、前の学校では特別支援学級籍でした。相手の気持ちを気遣えず、責める口調で話したり、思いどおりにならないと泣くなどの様子が見られました。落ち着いていた女子たちにとって、C子とのかかわりは難しいものでした。

●これまでの取り組み

- こうした実態を受け、一学期は次の取り組みをしました。
- ・クラスワイドのピア・サポート（七月の自然体験教室で）
- ・対立の解消、傾聴練習、プラスのストローク
- ・よいところさがし
- ・学び合いの授業の実施
- ・個別の声かけ、一人一人との相談タイム

●現在の状態

七月に二回目のアセスを実施したところ、「非侵害的關係」「向社会的スキル」は1点増加したものの、「友人サポート」「生活満足感」は1点減少しており、学び合い、かかわり、縦割り班活動での担任からの期待や指導が強すぎた可能性もあると考えています。また、学習内容も難しくなり、「学習的適応」

において、得点が30未満の子を示す赤が増加しました。

ただ学級はまとももできていて、ささいなトラブルはあるものの、相手の話をよく聴いて、トラブルや問題を自分たちなりに解決しようとする姿や、友達同士でサポートする様子が多く見られるようになっていきます。

A男は一学期、学級代表になりました。幼さからか、言行不一致な部分も見られ、周囲からよい評価をもらうことが少なかったのですが、本人なりに責任を果たそうと努力しました。B男とのトラブルもお互いに理解し合う中で減少してきました。また、B男も授業や自然教室の活動班長としての役割を遂行する中で、友達とサポートし合う姿が見られました。

●課題と感じていること

- 担任が課題と感じているのは次のようなことです。
- ・学級全体の人間関係づくり
- ・粗暴な男子児童への指導（No31「A男」、37「B男」、3）
- ・リーダー的な女子児童たちへの指導（No15、16）
- ・不登校傾向のある児童への支援（No9、18、40）
- ・学力向上（No21、17、18、39）
- ・おとなしい児童への支援（No2、26、36）
- ・転入してきたアスベルガー障害のC子への指導（No41）

使ってみよう！アセス

一般論ですが、「ちゃんとする」ことを要求する厳しい担任